

2-6 ニホンザルの食物パッチ利用に対する生態的・社会的要因

風張喜子（北海道大・院・農）

これまで多くのパッチモデルが提出されてきたが、それらは霊長類の食物パッチ利用を説明しきれていない。その理由は、対象となった種は群れを形成し、他個体の存在がパッチ利用に対して重要な影響を及ぼしているためと考察されている。そこで、本研究では宮城県・金華山島のニホンザルにおいてパッチの質（パッチサイズ・食物密度・周辺パッチの数）と社会的要因（パッチ内の個体数・順位）がパッチ利用の局面（滞在時間・食物の取り込み速度・パッチ内の探索時間・採食効率）に及ぼす影響を定量化した。2004年の春にB₁群を対象として調査を行い、主要食物となった3品目ごとに分析した。

滞在時間は樹冠の小さな品目でパッチ内の個体数が多いほど短く、樹冠の大きな品目でパッチ内の個体数が多いほど長くなる傾向があった。取り込み速度、採食効率は3品目でパッチ内の個体数が多いほど向上する傾向が示された。また、パッチ内の個体密度・個体間の干渉頻度は低かった。パッチ滞在中に採食効率の低下が起こらなかった。これらのことから調査時期において消費型・干渉型競争が弱かったと言える。このような食物環境下では他個体の存在が採食効率を向上させ得ることが示唆された。

2-7 管理を目的とした三重県下のニホンザル遺伝子モニタリング

赤地重宏（三重県中央家畜保健衛生所）

三重県下において、ニホンザルの被害防除を目的とし、電波発信機を用いてサル動向を把握し、対策を実行する試みがなされている。発信機装着のためのサル捕獲の際、採血を実施することで血液材料を多数採集することができた（約400検体）。今年度も昨年度に引き続き、抽出したDNAを用い、霊長類研究所のキャピラリーシーケンサーを利用して遺伝子の解析を実施している。現在のところ捕獲時の位置情報が特定できているサルのうち、メスを中心に83検体の解析を実施した。結果の検討等については現在進行中である。今後、これらデータを用い、位置情報と遺伝子情報を合わせて検討することで地域個体群の遺伝的構造を明確にしたいと考えている。

2-9 オスの行動が、群れによる農作物の加害に与える影響について

清野紘典（宮城教育大・院）

2004年度までのニホンザル野生群による農作物への加害及び出没状況調査において、オトナまたはワカモノオスがメスやコドモよりも積極的で、かつ無警戒に農耕地に出現することが示唆され、群れによる農作物の被害レベルや農地への慣れに、特定のオスが何らかの影響を与えていることが推測された。

そこで、どのようなオス個体が影響を及ぼしているのか明らかにするために、群れオスを個体識別することで順位や年齢構成の相違による農耕地での行動差異を調査することを計画した。

しかし、識別の指標として電波発信機の装着を試みたが、捕獲檻に対する対象群のオスの警戒心は強く、捕獲努力に対し目標捕獲数（群れのオトナオス7頭のうち4頭）に達せず調査進行が困難な状況であった。

一方で、対象群のホームレンジ内で捕獲したオトナのオス個体2頭の連続追跡から短期的ながらもソリタリーの行動圏と隣接群との関係についての資料を得た。

今後は、群れオスの個体識別を継続するとともに、人為的環境に依存したソリタリーの動向と近接群への影響についても明らかにしたい。

2-10 富山県のニホンザル地域個体群の分布特性と遺伝子変異

赤座久明（富山県立雄峰高等学校）

富山県に生息するニホンザルの群れの由来や隣接する群れの類縁関係を探るため、mt-DNAのDループ領域で塩基配列を比較した。14、15年度の共同利用研究から、県内で7タイプ（A,B,C,D,E,F,G）のmt-DNAが検出され、このうちA,B,C,Dは群れ所属のメスから検出され、県内の群れはこの4タイプの集団から構成されることが明らかになった。Dタイプは県の東部に偏って分布し、分布域の先端は黒部川上流域の黒四ダムに至っている。16年度はこのDタイプに注目し、この集団が北アルプス後立山連峰を越えて、長野県側にまで分布拡大しているか、また、日本海に沿って北上し新潟県に至っているかどうかを確認するため、DNA試料の採集と分析をおこなった。60個の糞とオス1個体の血液を分析した結果、長野県扇沢の群れからはG、新潟県糸魚川の群れからはDを検出した。これにより、Dの集団は北アルプスを越えて長野県側へは至っていないが、日本海に沿って新潟県糸魚川市までは北上していることが明らかになった。また、夏に後立山の稜線を利用するGの群れからBとDを1例ずつ、黒四ダムの群れからGを2例検出した。北アルプスを越えて、